

二本木遺跡

塩尻市立片丘小学校改築工事
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1991

塩尻市教育委員会

序

二本木遺跡は塩尻市大字片丘南内田に所在する片丘小学校の付近に広がっており、以前より縄文時代と平安時代の複合遺跡としてよく知られていました。この度、片丘小学校改築工事に伴い遺跡の一部が破壊されることになったため、埋蔵文化財保護の立場から工事に先立ち発掘調査を行うことになりました。

発掘調査は工事の都合上、4月中旬から6月上旬までと8月末から9月末までの2回に分けて、天候にも恵まれたことから順調に行なわれ、その結果、数多くの成果をあげることができました。特に今回、住居址群の発見によって、これまで採集遺物のみで推測されていた古代大集落の一端が露呈され、内田原・君石など知名度の高い遺跡が密集する同地域の中で、新たな古代集落の資料を提供したといえましょう。

この発掘調査が無事完了するについては、片丘小学校校長小野宗昭氏をはじめとして学校関係職員の方々、並びに児童の皆様の深い御理解と暖かい御援助によるものであり、ここに心から敬意と感謝をささげる次第であります。

また炎天下の過酷な作業に献身的に御協力いただいた調査員、作業員の方々に重ねて謝意を表するものであります。

平成3年1月

塩尻市教育委員会

教育長 平出友伯

——例　言——

1. 本書は、塙尻市立片丘小学校改築工事に伴い、平成2年4月12日から6月7日、および8月31日から9月28日にわたって発掘調査した塙尻市大字片丘南内田の二本木遺跡発掘調査報告書である。
2. 遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、平成2年5月から平成3年2月にかけて行なった。作業の分担は次のとおりである。
遺構……整理、トレース：鳥羽、中村。
遺物……洗浄、註記、復元、拓本、実測、トレース：小林、市川、古賀、中村、一ノ瀬
写真……鳥羽
3. 本書の執筆は第Ⅳ章の遺物を小林が、それ以外を鳥羽がそれぞれ分担した。
4. 本書の編集は鳥羽が行なった。
5. 調査にあたり、片丘小学校校長小野宗昭氏、同教頭浅野雅樹氏、ならびに学校関係職員、児童の方々の御理解、御援助をいただいたことを明記し、お礼としたい。
6. 本調査の出土品、諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目 次

序	
例 言	
第Ⅰ章 調査状況	1
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査日誌	2
第4節 遺跡の状況と面積	6
第Ⅱ章 遺跡周辺の環境	7
第1節 自然環境	7
第2節 周辺遺跡	8
第Ⅲ章 遺跡の概要	10
第1節 遺跡の概要	10
第2節 発掘区の設定	12
第Ⅳ章 遺構と遺物	13
第1節 住居址	13
第2節 建物址	17
第3節 小竪穴	17
第Ⅴ章 結語	27

第Ⅰ章 調査状況

第1節 発掘調査に至る経過

塩尻市では現在、市内小中学校の改築事業を年次計画で進めているところであるが、その一環として平成2年度から市内片丘南内田にある片丘小学校の改築工事が実施されることになった。折りしも、片丘小学校の敷地を含む付近一帯は、平安時代を中心とする二本木遺跡となっており、新校舎の建設が行なわれる箇所、すなわち現在の敷地の南側から東側にかけては原地形が保存されているため、工事により遺跡が破壊を受けることが明らかになり、工事施工前に発掘調査を行ない、記録保存することになった。平成元年8月30日、市学校教育課古川と平出遺跡考古博物館小林、鳥羽の3名は現地で調査区域と調査時期の協議を行ない、平成2年度に校舎が建設される南側（調査区では第Ⅰ区とする）を平成2年の春に、3年度以降に校舎が建設される東側（第Ⅱ区）を平成2年の秋にそれぞれ調査することに決定した。

第2節 調査体制

団長 小松 優一（塩尻市教育長）

担当者 小林 康男（日本考古学協会員、市教委）

調査員 鳥羽 嘉彦（日本考古学協会員、市教委）

市川二三夫（長野県考古学会員）

参加者 赤津道子 池田貴江子 小沢甲子郎 川上奈美江 小松幸美 小松義丸
小松静子 清水年男 高橋鳥億 高橋阿や子 高橋タケ子 中野やすみ
中村洋子 藤松謙一 松下おもと 小松貞文 小松礼子 手塚きくへ
山口仲司 吉江みより 赤城圭一 伊沢みきゑ 大和豊美 大和廣
上條スミ江 小松淳子 手塚常子 藤村きみ 松島まつ子 吉野宗治
柳沢 一 渡辺 明 古厩馨子 中村ふき子 一ノ瀬 文

事務局 市教委総合文化センター所長 寺沢 隆
〃 文化教養担当課長 横山哲宣
〃 文化教養担当副主幹 大和清志
〃 平出遺跡考古博物館長 小林康男
〃 平出遺跡考古博物館学芸員 鳥羽嘉彦

第3節 調査日誌

- 平成2年4月5日（木）曇 学校教育課と現地立合。調査区の確認。5ヶ所に試掘坑をあけ、土層の堆積状況を調べる。
- 4月12日（木）晴 パックホーとブルドーザーによる表土除去。調査区西端から始める。中央から北寄りは約30cmでロームに達したが、南側は1m掘削してもロームに達せず、その高さでとめる。
- 4月13日（金）曇時々雨 重機休み。器材搬入。プレハブ、トイレを現地に設置。
- 4月14日（土）晴 重機による表土除去続き。周辺の表面踏査。
- 4月16日（月）曇 重機による表土除去続き。中央付近で縄文土器片出土。東端より15m西側で焼土確認。
- 4月17日（火）曇時々雨 重機による表土除去続き。昨日の焼土の6m北側に住居址らしい落ち込みを発見。
- 4月18日（水）晴 本日より発掘作業開始。横山文化教養担当課長、小野片丘小学校長より挨拶、事務局より発掘日程、作業方法等の説明があったのち、器材準備、テントとトイレの設営。調査区南西隅よりジョレンによる遺構検出作業を開始する。重機による表土除去作業終了。昨夜、周囲の山々に雪が降り、今日は寒い一日だった。塩尻日報記者来訪。
- 4月19日（木）晴 西側を昨日に引き続き検出作業。土師器、須恵器、灰釉陶器が出土。片丘小学校6年2組の児童手伝い。塩尻日報記者来訪。
- 4月20日（金）曇 中央域の遺構検出作業。相変わらず南側では遺物の出土がみられるが、依然として遺構はなし。調査区の西端および南端に5m間隔の杭打ちをし、基準線を設定する。
- 4月21日（土）、22日（日）定休日。
- 4月23日（月）雨天中止。
- 4月24日（火）晴 中央～東側の検出作業。須恵器、土師器、灰釉陶器わずかに出土。中央部に3個の小型穴が南北方向に一列に並ぶ。
- 4月25日（水）晴 東側の遺構検出作業。土師器片の一括出土がみられる箇所があり、落ち込みも認められることから住居址の可能性がある。中央～西側に比較して遺物の出土量が多くなる。石匙1点出土。杭打ちをし、調査区内と大部分のグリッドを設定する。
- 4月26日（木）晴 東側の遺構検出作業。拳大～頃大の礫が多く作業がはかられない。片丘小学校6年1組児童手伝い。小学生の作業の様子をテレビ松本取材、夕方放映。
- 4月27日（金）晴 東側の遺構検出作業。東隅より住居址検出。礫群の除去。厚さ50～60cmに及ぶ拳大～人頭大の礫がすき間に多く堆積しており、作業難行する。鉄錆、鉄釘、打製石斧、土製玉出土。
- 4月28日（土）～5月6日（日）連休により現場休み。
- 5月7日（月）曇 東側の遺構検出作業。南北に延びる土手状の落ち込み部分の掘り下げ。風

強く寒い一日。夕方から雨。

- 5月8日（火）晴 西側遺構検出作業。西端からもう一度、ジョレンによる遺構検出作業を行う。南側はかなり表土が厚いため、次回はトレーナーを設定し、部分的掘り下げを行うこととする。
- 5月9日（水）晴 中央域遺構検出作業。北半部の微高地上に小堅穴状の落ち込みが、多数発見される。南半部はほとんど出土遺物なし。
- 5月10日（木）晴 中央域遺構検出作業。住居址3軒と小堅穴数基を検出。北縁の土手沿いは遺構なし。5年生児童手伝い。
- 5月11日（金）曇 東側遺構検出作業。雨が降らないため地表が乾き、検出作業に難儀する。残りの杭打ちを行い、調査区全域のグリッド設定終了。南から北へA～J、西から東へ1～13。
- 5月12日（土）、13日（日）定休日。
- 5月14日（月）曇 のち雨 遺構検出作業継続。削り足りない箇所の遺構検出を行う。中央の微高地は、まだ10cm位削れる見込み。昼、降雨になったため作業中止。
- 5月15日（火）晴 昨日に引き続き中～東側の削り足りない箇所の遺構検出作業。昨夜から早朝まで降り続いた雨のおかげで、検出が容易になる。4年生児童手伝い。
- 5月16日（水）晴 各遺構およびトレーナーの掘り下げ開始。G・H-6、削平により住居と思われていた落ち込みが消滅し、数基の小堅穴となる。K・L-5の方形プラン、検出時にカマド上面が露呈しており、またプランも明確なところから第1号住居址とする。焼土、炭が床面に散在しており、焼失家屋と推察される。K・L-4の方形プラン、掘り下げたところ覆土に礫がガラガラ入り、また底も起伏が激しいところから住居址かどうか疑問。N-3の落ち込み、20cm掘り下げたが、土器や須恵器出土。O-7の落ち込み、須恵器若干出土。タタキの床を発見し、第3号住居址とする。N-1・2トレーナー掘り下げ。出土遺物なし。
- 5月17日（木）晴 第1号住居址、土器や須恵器が続出。K-5の方形プラン、第1号住居址と同様、北壁中央にカマドがあり、焼土が散在。やはり焼失家屋だろう。第2号住居址とする。小堅穴、西側から掘り始める。
- 5月18日（金）曇 第1号住居址、セクション図化、ベルト取りはずし。第2号住居址、全面に床面を検出。焼土の分布多い。周溝を検出。第3号住居址、周溝を確認。小堅穴、セクション図化。
- 5月19日（土）、20日（日）定休日。
- 5月21日（月）晴 第1号住居址、遺物取り上げ。第2号住居址、セクション図化。第3号住居址、平面図測図。
- 5月22日（火）晴 第1号住居址、床面精査、周溝はあるが柱穴なし。カマド半截。第2号住居址、床面検出。小堅穴掘り下げ、セクション図化。A～Dトレーナー掘り下げ。
- 5月23日（水）晴 第1・2号住居址、平面図測図。柱穴址は南側へ拡大し、20×10mの大形となる。A～Dトレーナー掘り下げ。
- 5月24日（木）晴 第1・2号住居址、カマドセクション図化、完掘。小堅穴掘り下げ、セク

- ション図化。A～Dトレント掘り下げ。3年生2クラスの児童手伝い。
- 5月25日（金）晴 第1・2・3号住居址、写真撮影。第4号住居址、ベルトはずし、写真撮影、平面図測図。Aトレント、セクション図化。小豎穴、トレント掘り下げ。
 - 5月26日（土）、27日（日）定休日。
 - 5月28日（月）晴 小豎穴、33号～35号セクション図化。H-6の小豎穴、半月状で深く、底にカマド状のものあり。B～Dトレント掘り下げ、両側が浅く、いずれも中央が深い。塩尻日報記者來訪。
 - 5月29日（火）晴のち曇 柱穴址掘り下げ。B～Dトレント掘り下げ。東側の溝状地形を確認するため、溝方向に直角にL-7グリッド付近に幅1mのトレントをあける。地形全体図測図。
 - 5月30日（水）晴 B～Dトレント掘り下げ。小豎穴、平面図測図。
 - 5月31日（木）晴 B～Dトレント掘り下げ。小豎穴、トレント平面図測図。全体写真撮影および片付け。本日にてⅠ地区の調査をすべて終了する。
-
- 8月31日（金）晴 Ⅱ地区の表土除去作業。バックホーを使用し、北側半分（中央を横切る農道から北の部分で、以後、北区とする）の表土を除去する。北区の南側半分は表土が非常に薄いのに対し、北側は急激に深くなる。
 - 9月1日（土）晴 昨日に引き続き南側半分（同様に以後、南区とする）の表土除去。地形がかなり変化しているらしく、起伏に富んでいる。
 - 9月3日（月）晴 本日よりⅡ地区の発掘作業開始する。器材点検の後、南区からジョレンによる遺構検出作業に入る。
 - 9月4日（火）晴 昨日に引き続き北区の遺構検出作業。南側はすでにロームがきれいに現われたが、遺構らしきものなし。風が強く埃がひどかった。
 - 9月5日（水）晴 南区の遺構検出作業。地面が疊混りでガチガチしており、ツルハシを用いるが捗らず。
 - 9月6日（木）晴 南区の遺構検出作業続行。東側の高い所で土師・須恵器の破片がバラバラと出土する。
 - 9月7日（金）雨 中止。
 - 9月8日（土）、9日（日）定休日。
 - 9月10日（月）晴 南区の遺構検出作業。金曜日の雨により地面が軟かくなり、いくらか作業が捗る。
 - 9月11日（火）晴 午前中もう一度、北区の遺構検出作業。中央の落ち込みの縁で遺物の出土量多くなる。5m間隔に杭打ちをし、グリッドを設定する。午後、南区に2本の東西トレントを設定し、掘り下げる。北区の遺物出土区O-24付近も掘り下げる。
 - 9月12日（水）曇 トレント掘り下げ。出土遺物なし。
 - 9月13日（木）曇時々雨 トレント掘り下げ。

- 9月14日（金）曇時々雨 トレンチ掘り下げ。N・P両トレンチともロームに達せず、かなり表土が厚くなっている。南区では北端も南端も表土が薄く、すでにロームが露呈していることから、かなり地形の起伏が著しいと思われる。昨日、今日と小雨による中断が頻繁で作業が捗らず。
- 9月15日（土）、16日（日）定休日。
- 9月17日（月）曇 南区中央の2本のトレンチに底が出てこないため、すでにロームの出ているN-11、N-18にトレンチを入れる。北区、O-24・25付近、須恵器片とともに多量の鉄片出土。鉄の種類は不明。
- 9月18日（火）晴 N-11、-40cmでロームが出る。1m幅のトレンチで北へ延ばしていく。R-14、南へ傾斜する東西方向の土手状地形を検出。
- 9月19日（水）曇 トレンチ掘り下げ。N-18の落ち込みには大量の礫が埋設しており、難儀する。
- 9月20日（木）雨天中止。
- 9月21日（金）晴 昨日の雨がかなりトレンチ内に浸水しており、午前中はトレンチ内の泥土上げ。N-18の土手状地形を追い、L-17・18に南北方向のトレンチをあける。N-11から北へ延びるトレンチは14トレンチまで設定し、掘り下げる。
- 9月22日（土）、23日（日）、24日（月）定休日。
- 9月25日（火）曇 N-11～14トレンチ、ローム面は緩く北へ単純傾斜しているが、途中2箇所に砂疊層がみられ、東西方向に小さな地表流水があったことが窺われる。2ヶ所で土層柱状図測図。L-18の底にカーペットが敷かれており、その下に礫が埋設されていた。L～N-18に検出された土手状の地形は、このガニ水道を敷設する際掘られた溝であることが判明した。
- 9月26日（水）曇のち雨 北区の遺物集中区掘り下げ終了。結局、遺構らしきもの皆無。II地区全体図測図。昼から降雨のため作業中止。
- 9月27日（木）晴 N-11～14トレンチ掘り下げ終了。北区南側のローム面に発見された数基の穴を掘り下げ。浅く、耕作によるものと思われる。器材片付け。全体写真撮影。本日にて現場における全調査日程を終了する。
- 9月28日（金）晴 器材撤収。

整理作業は、10～2月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土品、記録類の整理、報告書の図版作成、原稿執筆作業。

第4節 遺跡の状況と面積

遺跡名	場 所	現 況	種 類	全体面積	事業対象面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
二本木	塙尻市大字片丘 5,068番地外	畑 地	包蔵地	45.000m ²	5,500m ²	4,000m ²	5,000m ²	6,400,000円

第1表 発掘調査経過表

月 作業内容	4	5	6	7	8	9	10~2	主 な 遺 構	主 な 遺 物
発 掘	12	7			31	28		平安時代住居址 4 建 物 址 1 小 穂 穴 30	绳文時代中期 土器・石器 平安時代 土師器 須恵器・灰釉陶器
整 理					遺物整理・図面作成・原稿執筆				

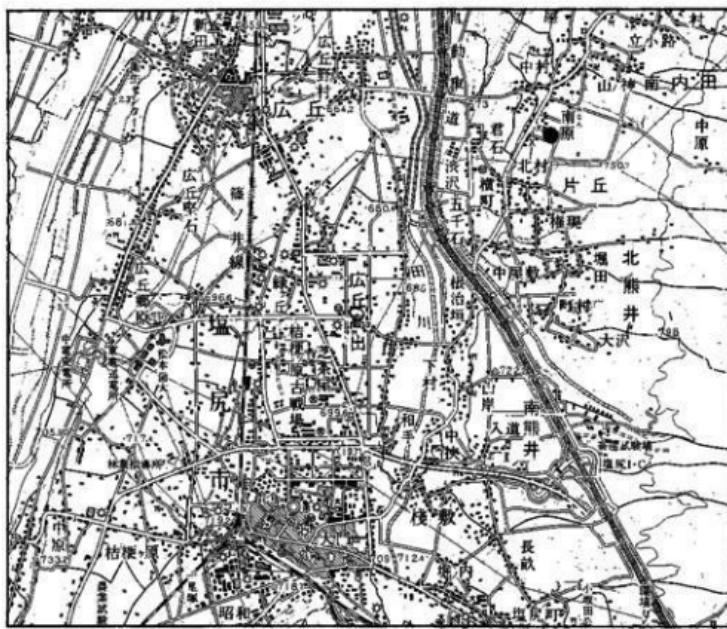
第II章 遺跡周辺の環境

第1節 自然環境

二本木遺跡は塩尻市の北東部、片丘南内田区にあり、現在の片丘小学校の敷地の東側に所在する。分布調査の結果から推定される遺跡の範囲は、南北約300m、東西約200mの広範囲に展開しており、遺跡の中心は小学校の校舎の南東側に伺うことができる。

付近は高ボッチ山塊の西麓斜面に発達した片丘丘陵の末端部にあたり、平均勾配4°と相当急な斜面を西へ向けている。また山麓から流下する群小の河川はこの丘陵上に幾多の複合扇状地を形成させ、松本盆地南部の東縁部を北流する田川へと注ぎ込んでいる。

二本木遺跡の立地する丘陵は、大沢と小場ヶ沢川によって形成された広範囲の複合扇状地上にあり、日当りのよいテラス状の緩斜面をなしている。遺跡の北側には約250m離れて、小場ヶ沢川が西流しており、その間には松座堅敷遺跡が展開している。また南側には境沢川（南内田区と北



第1図 二本木遺跡位置図

熊井区の境界)が近隣しており、対岸には境沢遺跡が対峙している。今回の発掘区内では複数の小河川跡や、その氾濫堆積物が見つかり、近年まで影響を受けていたことが確認されたが、これらはすべて境沢川に起因するものと聞く。昭和43年に施工された圃場整備により現在は付近一帯均らされ、往時の起伏に富む地形の面影はない。標高は711m~715mである。

第2節 周辺遺跡

二本木遺跡の立地する丘陵は、小場ヶ沢川と境沢川によって形成された複合扇状地上にあり、日当りのよいテラス状の西向緩斜面をなしている。この丘陵上には豊かな立地条件を反映して数多くの遺跡が占有しているが、それらの中には市内を代表する遺跡もいくつかみられる。標高の高い方から、小丸山遺跡(770~790m)、内田原遺跡(730~760m)、松座屋敷遺跡(715~725m)、二本木遺跡(710~725m)、君石遺跡(680~700m)、下境沢遺跡(685~695m)、沢遺跡(670~680m)、別方遺跡(670~675m)であり、また二本木遺跡と同じ標高で両河川の対岸に広がる遺跡として、小場ヶ沢川側に上手村遺跡が、境沢川側に境沢遺跡がそれぞれある。本遺跡に隣接するこれらの遺跡について以下概観してみたい。

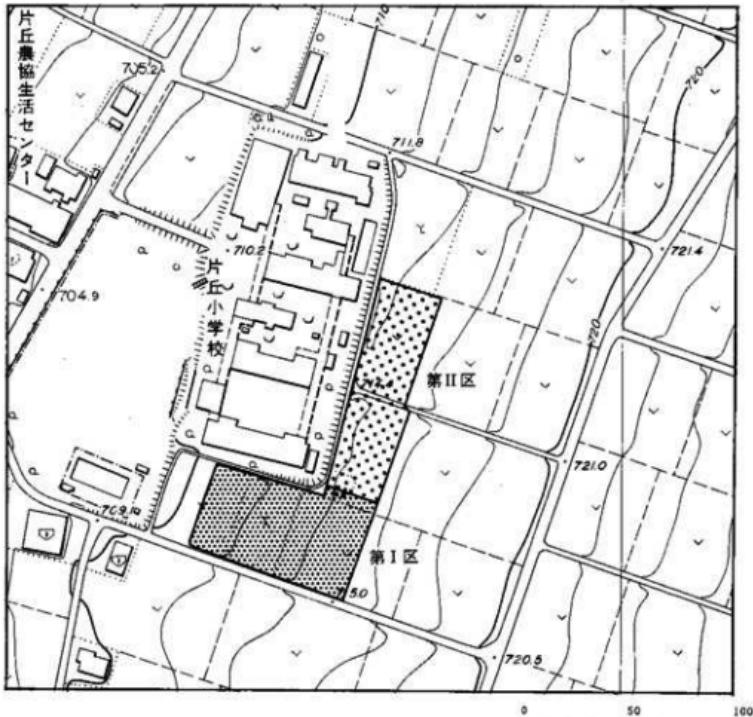
小丸山遺跡では、縄文時代中期の住居址26軒、平安時代の住居址1軒が検出され、また先土器時代の尖頭器が採集されている。内田原遺跡では平安時代の住居址18軒が検出されており、焼失



1.古屋敷 2.鐵冶屋 3.久保在家 4.上手村 5.無量庵 6.弁当原
7.松葉屋敷 8.小丸山 9.内田原 10.二本木 11.境沢 12.君石
13.下境沢 14.孤塚 15.日向 16.別方 17.沢 18.新田

第2図 遺跡範囲図

家屋である1号住からは多量の土器の他に、砥石、刀子、帯金具、鉄鎌、紡錘車、炭化状の布と糸など古代の庶民生活の一端を良く示す遺物が出土した。二本木遺跡とは横に並ぶ松座屋敷遺跡では縄文時代中期土器、打製石斧、平安時代土師器・須恵器が採集されている。君石遺跡では平安時代の住居址1軒、方形周溝墓1基とそれに伴って縄文前期・弥生後期の土器、土師器・須恵器、打製石斧、石鎌が出土している。また縄文時代晚期終末の大形壺形土器が耕作中に発見されている。下境沢遺跡では縄文時代晚期終末～弥生時代中期、平安時代の遺物が出土しており、また渋沢遺跡では縄文前期・中期・後期・弥生中期・後期・平安時代の各期にわたる遺物が採集されている。上手村遺跡は東側の弁当原遺跡とは途切れることなく隣接しており、二本木・内田原の続き方と非常に酷似している。縄文時代中期の遺物が中心であるが、中世の内耳土器片も採集されている。最後に境沢遺跡であるが、やはり縄文時代中期と平安時代の遺物が採集されており、片丘小学校に保管されている土器類に比較的大形の破片がみられるところから、縄文中期の大遺跡が期待されている。



第3図 調査地区図

第III章 遺跡の概要

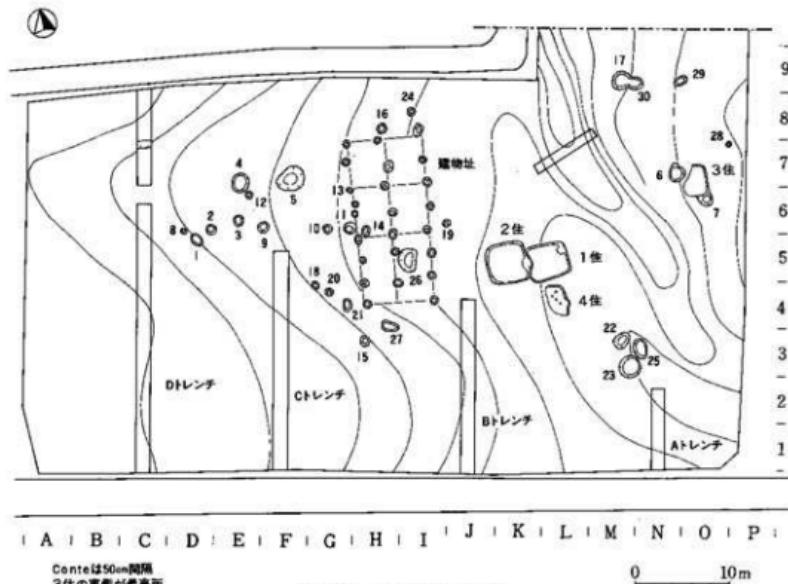
第1節 遺跡の概要

今回発掘調査の対象となった二本木遺跡は、塩尻市北東部、片丘南内田にある片丘小学校の敷地を中心に所在し、片丘丘陵の緩やかな西向きの斜面上に展開する。発掘地区は現在の校舎の南側および東側にある畑地に設定され、調査面積は5,000m²に及んだ。

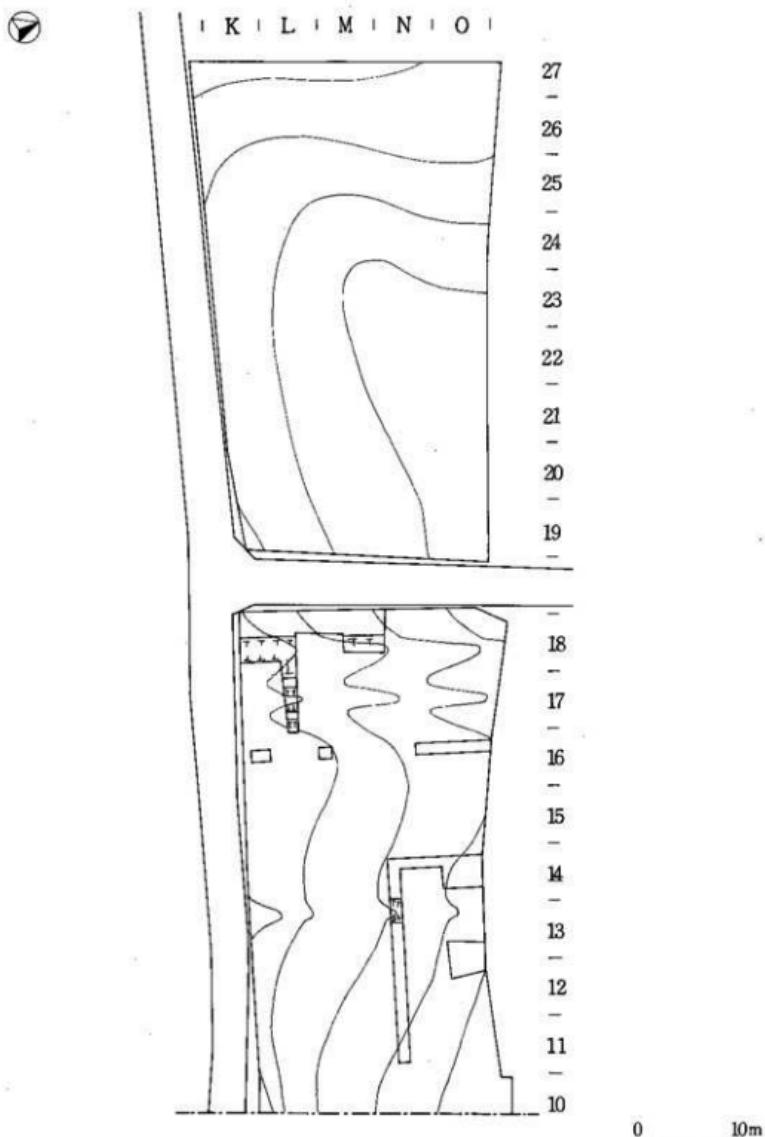
調査の結果、遺構には平安時代の竪穴住居址4軒と建物址1棟、小竪穴30基が検出され、これらの遺構に伴なって縄文時代中期の土器・石斧・石鎌、平安時代の土師器壺・甌・須恵器壺・灰釉陶器皿が出土した。

住居址は1号、2号が共に焼失家屋で比較的の保存状態が良かったため、良好な資料が得られた。分布状態から、集落の中心はさらに東方にあるとみられる。

建物址は7間×2間と非常に大形のもので、この種の発見例としては市内でも最大規模を誇る。23基の柱穴のどこからも遺物の出土が皆無で、時代を決定することはできなかった。1号・2号住居址を別にすれば、遺物の出土量は少ない感があった。おそらく表土の流出や出水等で、遺構・遺物ともにかなり消失しているものと思われる。また遺構を伴なわない縄文遺物の出土は斜面



第4図 I地区全体図



第5図 II地区全体図

上方に縄文の集落があることを示唆している。

第2節 発掘区の設定

二本木遺跡は現在の校舎付近を下限とし、斜面上方へ広く展開している。従って元々は校舎の位置も遺跡が存在していたと思われるが、残念ながら校舎敷地の造成時に斜面に高い切り通しを設けることにより平坦域を造ったため、遺跡は削平され消滅している。今回は改築工事に伴ない現在の敷地の南側と東側を用地買収により拡張することになった。付近は昭和43年度に一度、園場整備が行なわれているが、この部分は現行の高さではほとんど削平が行なわれなかつたことを確認し、遺跡が保存されている可能性があることから、発掘調査をする運びとなった。

調査は二度に分け、今年度校舎が建設される南側をI地区、来年度以降に建設される東側をII地区とし、それぞれ4月～6月と9月に調査が実施された。I地区とII地区は接しているため、統一したグリッド番号をつけた。グリッドは5m間隔で、西から東へ向かってA～P、南から北へ向かって1～27の杭を設けた。発掘面積はI地区3,100m²、II地区1,900m²で、延べ5,000m²によよぶ。

第Ⅳ章 遺構と遺物

第1節 住居址

第1号住居址

遺構 第I区の東側ほぼ中央にあり、K・L-5グリッドに位置する。西側には第2号住居址が本址を僅かに漸って重複しており、また南側には第4号住居址が隣接している。本址は掘り下げの段階で覆土に多量の炭がみとめられたが、床面には、図にも示されるようにおびただしい量の炭化材と焼土が分布しており、火災により焼失した住居であることが明らかになった。

プランは西壁が一部、第2号住居址によって削平されているが、概ね隅丸方形の平面形態を呈すると考えられ、規模は東西460cm、南北390cmを測る。長軸方向はN-85°-Eを示す。

壁は疊質であるが、非常に丁寧に垂直に掘り込まれている。壁高は東壁15cm、西壁5cm、南壁11cm、北壁9cmと比較的浅い。床面も同様に疊質であるが、よく踏み固められ堅致である。平坦でわずかに西へ傾斜している。周溝は北壁沿いと南壁沿いに一部みられ、幅16cm、深さ6cmと稍大形のものである。カマドは北東隅に石組み粘土カマドが設けられている。覆土が浅いためか石組みは崩壊しており、一部左側の袖部分のみ遺存している。石は多少焼けているが、内部に炭や焼土はほとんど混入していない。

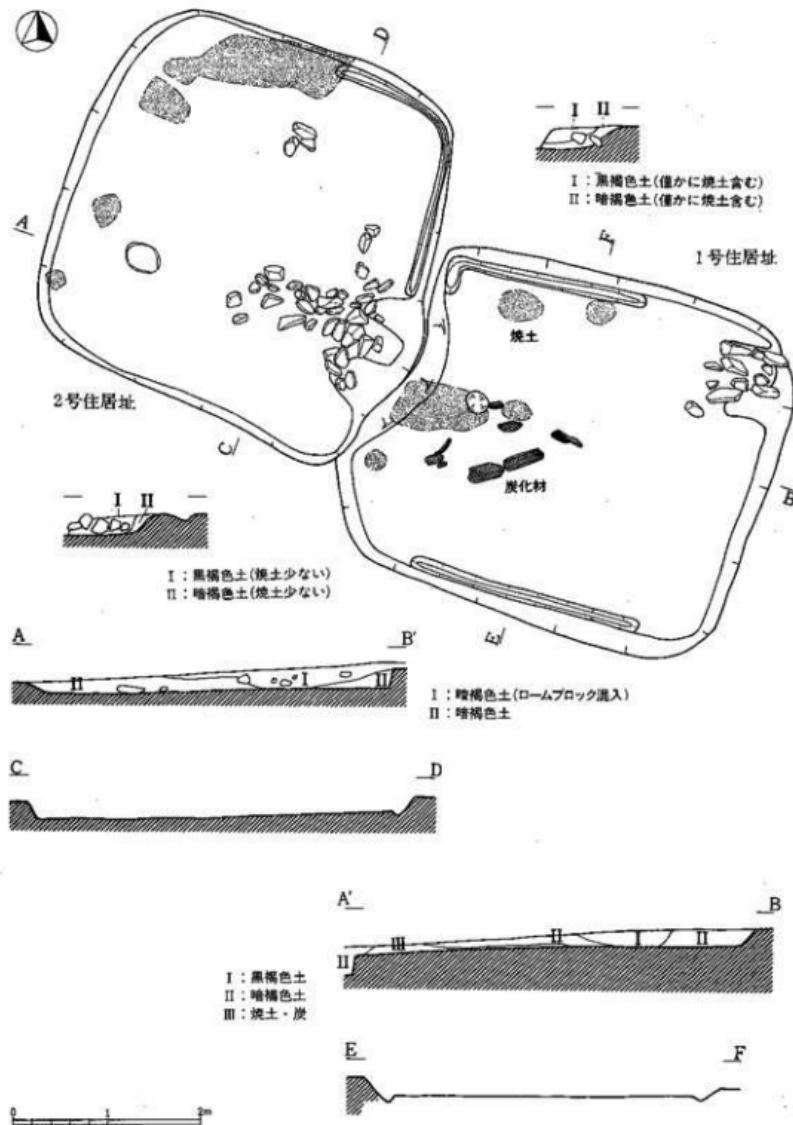
遺物 4軒の検出住居中、最も遺物の遺存状態が良かった。土師器壺(1~10)、塊(14)、瓶(15)、灰釉陶器皿(11~13)がある。土師器の7~10は墨書き土器で、7・8は「周?」、9は「上」と「毛」の2文字がある。瓶は体部をハケ目調整したもの。灰釉陶器12・13は塊状のやや深目のものである。時期は9世紀末から10世紀にかけてと考えられる。

第2号住居址

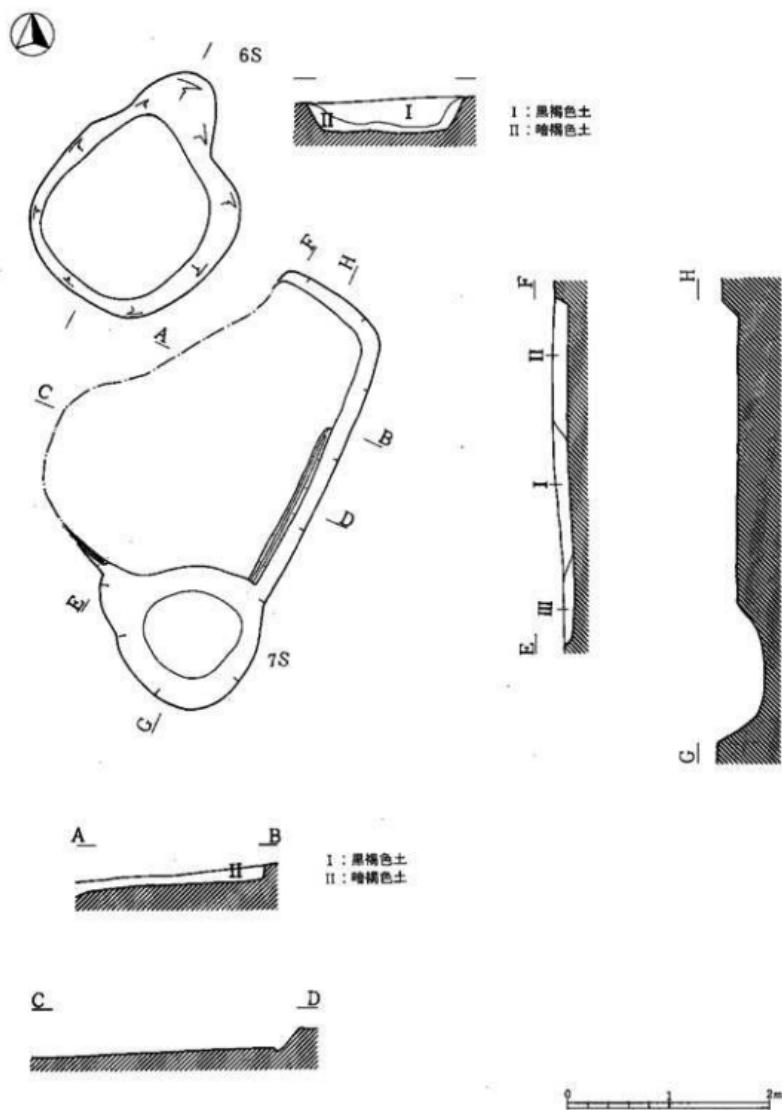
遺構 第1号住居址の西側に一部重複で接しており、重複部分に本址のカマドが存在するところから、本址の方が新しいことがわかる。第1号住居址と同様、床面上に多量の焼土が分布しており、やはり焼失家屋である。

プランは隅丸方形を呈し、規模は南北410cm、東西400cmを測る。長軸方向は南北を示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、東壁14cm、西壁10cm、南壁19cm、北壁18cmの壁高を測る。床は概ねよく踏み固められ堅致であるが、カマドの右脇、すなわち住居址の南東隅のみ比較的柔かい。疊質であるが第1号住居址のようには顯著でなく、またやはり西へ傾斜している。周溝は北東隅に部分的にみられ、深さ2~4cmと非常に簡素なものである。カマドは重複部分の東壁中央にあり、第1号住居址の床面を一部掘り込んで構築している。カマドに用いたと思われる疊は前面に崩れ落ちているが、かなりの量に及ぶ。中央北寄りに存在する疊群とともに、カマド以外の何らかの用途があったかもしれない。なお中央南西寄りには石皿が出土した。

遺物 土師器壺(16)、灰釉陶器皿、塊(17~19)と石製品(25)がある。19の塊は三日月形の高台



第6図 第1・2号住居址



第7図 第3号住居址、第6・7号小竪穴

を有し、輪花をもつてゐる。10世紀後半に属しよう。

第3号住居址

遺構 第I区の東端にあり、他の住居址群とはちょうど溝を挟んで対峙している。第7号小堅穴に漸られており、また西側は傾斜地形により床が流れている。

プランは全容が捉えられないために不明瞭であるが、残存壁の在り方より推して隅丸方形もしくは隅丸長方形の平面形態を呈すると思われる。

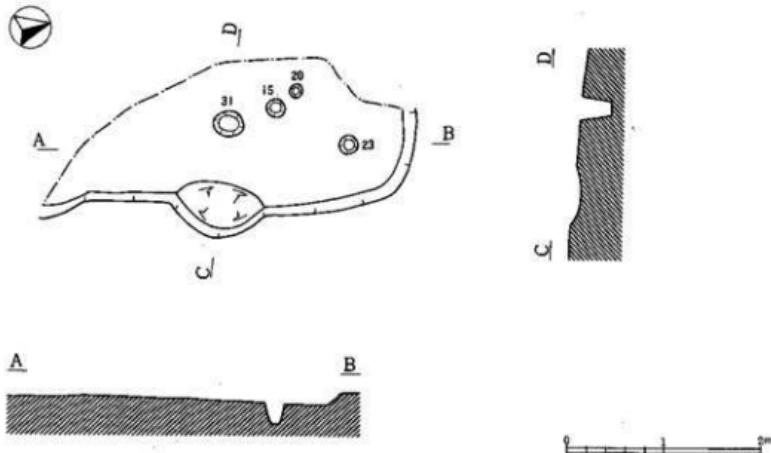
壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁高は東壁19cm、北壁16cmを測る。床面は一応タタキの痕跡が認められるが、著しく礫質で凹凸が激しい。東壁下に一部周溝が検出された。

遺物 遺物の出土はみられなかった。

第4号住居址

遺構 第I区の中央やや東側にあり、第1号住居址の南側に隣接している。付近はかなり擾乱が入っており、本址も西半分が流れているため、一部が検出されたにとどまった。

プランは隅丸方形で、大きさも他の住居址とほぼ同程度と思われる。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが浅い。壁高は東壁南側で9cm、東壁北側で5cm、北壁で13cmを測る。床面はよく踏み固められ堅緻であるが、やはり他の住居址と同様、礫質で凹凸が著しい。床面上にピットが4基検出されている。東壁中央にはカマド状の掘り込みがみられるが、カマドと判断する根拠がなく断定するに至らなかった。



第8図 第4号住居址

遺物 20の灰釉陶器塊が1点得られたもののみである。深目の塊で三日月形の高台を有する。時期は、10世紀末から11世紀であろう。

第2節 建 物 址

遺構検出の段階で、調査区中央付近においてピットの配列が認められた。柱穴の大きさもほぼ同規模であったため、すぐに建物址の存在を想定し、付近を詳細に精査したところ南北に延びるかなり大規模な建物址を確認した。東西2間(8.0m)で、3本の列が南北方向に延びており、この配列上のピット(柱穴)を拾っていくと、西列8基、中央列7基、東列8基の計23基のピットから構成され、南北17mに及ぶ。主軸方向はN-10°-Eで、これは付近の等高線方向と一致している。東列のピットが最も整然と規則正しく配列しているため、この列を基準にとると南北7間となり、柱門寸法は梁間2.4m、桁行4.0mとなる。柱穴はすべて円形で、径57~92cm、深さ13~64cmを測る。出土遺物はなく時代は不明であるが、規模などから考えると中・近世あたりの遺構ではないかとみられる。

第3節 小 竪 穴

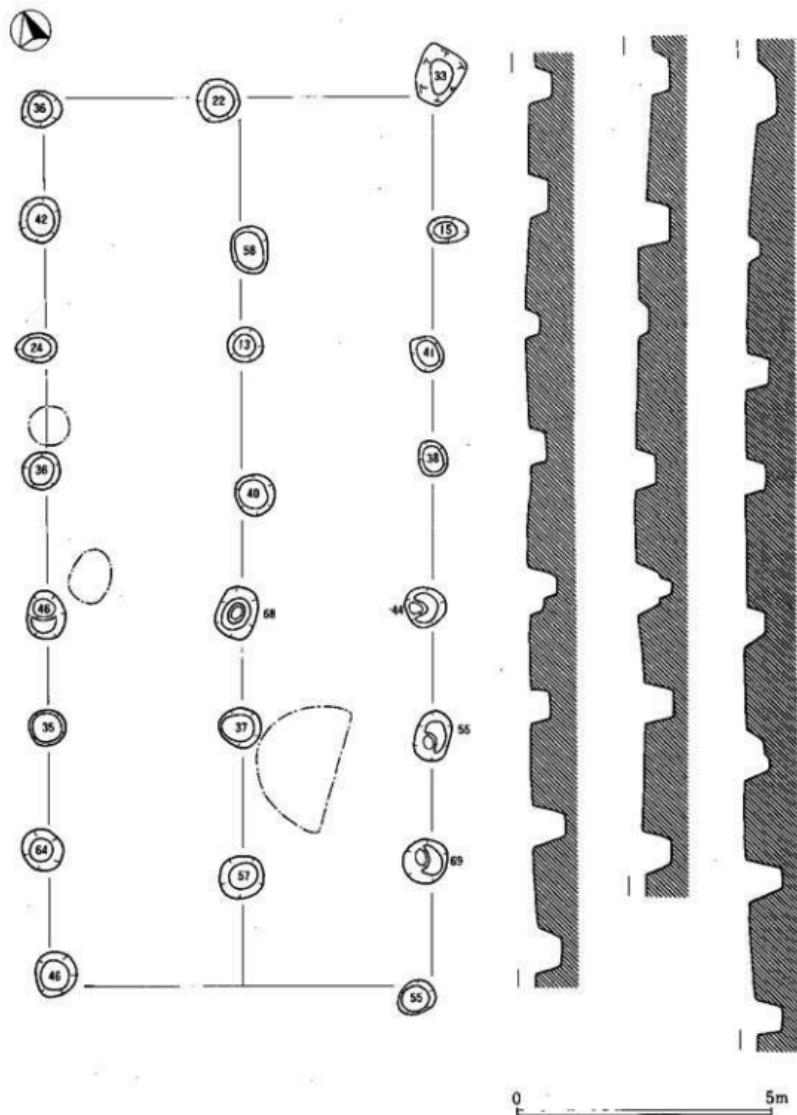
小竪穴は総数30基が発見され、第I区の尾根部に東西方向に分布がみられる。このうち約7割が建物址より西に分布しており、尾根の頂部から南斜面にかけて占有している。建物址の付近にも何基か検出されたが、規模が建物址のピットと同程度のため区別が難かしく結局、配列によって分けたため、相互に混同している可能性はある。検出面はローム面の僅か上方の暗褐色土層中にあり、黒褐色土が小竪穴自身の覆土となっている。

平面形態には円・楕円・長楕円・方形・不整形があり、規模としては径170~300cmを測る大形のものと、径70~120cmの小形のものが主体をなす。大形のものは比較的東域に多く、また小形のものは西域に多くみられる。

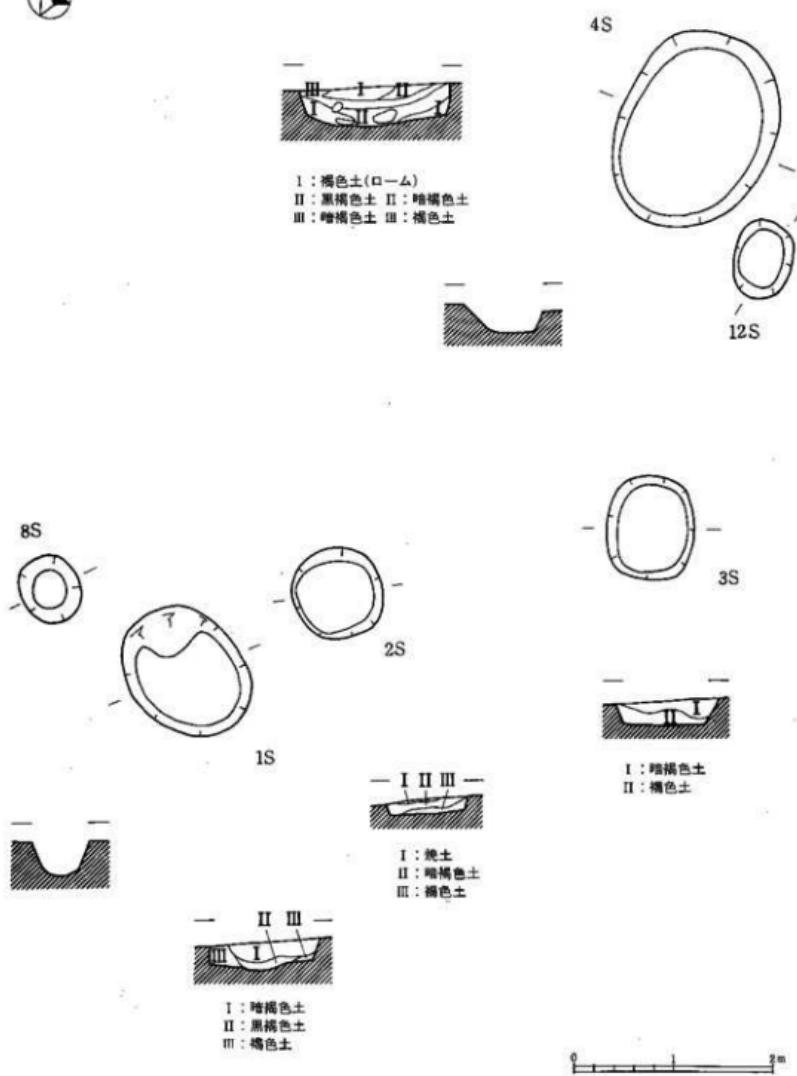
特筆すべきものとして、26号が特異的な形態を有している。平面形態は半円形で擂鉢状の断面を有するが、半円の弦側の中央下部にはカマド状の段差があり、特別な用途があったものと思われる。なお内部からは、遺物や炭など用途を伺わせるものは何も出土しなかった。

第2表 小豎穴一覧表

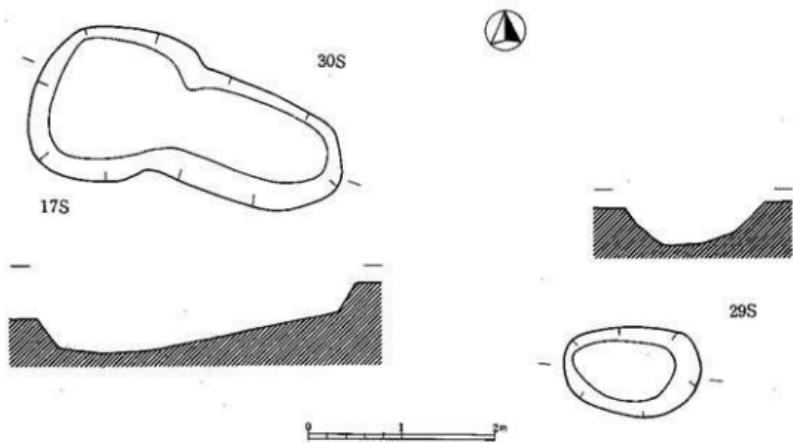
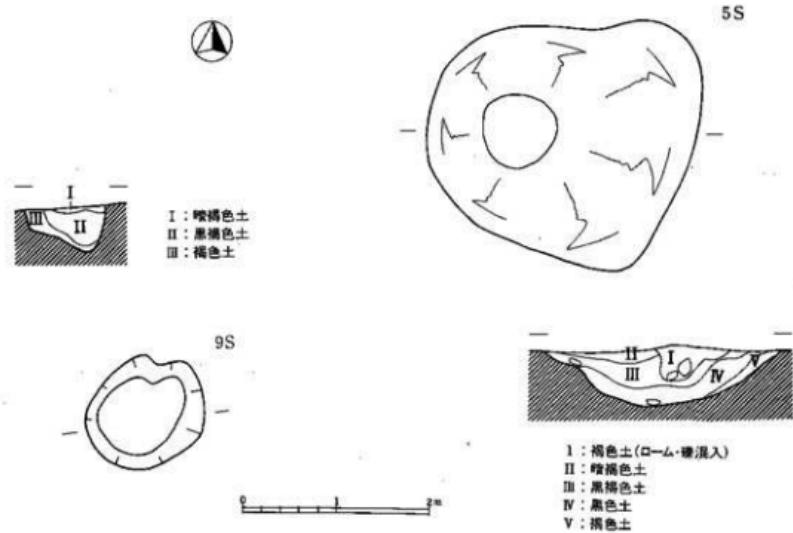
No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面形	底面規模	底面	深さ	備考	図版
1	145×115	楕円	N-33°-W	たらい状	115×95	やや平坦	20		1
2	95×95	円	—	たらい状	80×75	平坦	15		1
3	106×90	楕円	N-29°-E	たらい状	88×73	平坦	15		1
4	205×155	楕円	N-45°-E	たらい状	175×129	平坦	40		1
5	303×291	不整形	N-57°-E	擂鉢形	154×155	丸底	63		2
6	254×185	不整形	N-30°-E	たらい状	176×142	平坦	33		3H
7	166×145	不整形	N-63°-W	擂鉢形	93×90	丸底	48	3号住と重複	3H
8	70×60	楕円	N-27°-E	擂鉢形	36×34	丸底	35		1
9	125×120	不整形	N-80°-W	擂鉢形	90×75	丸底	40		2
10	105×90	楕円	N-78°-E	たらい状	70×60	段々	33		3
11	142×94	方形	N-62°-W	擂鉢形	125×80	丸底	44		3
12	70×59	方形	N-37°-E	たらい状	57×44	平坦	20		1
13	81×75	楕円	N-38°-E	たらい状	53×50	平坦	25		3
14	107×85	楕円	N-37°-E	擂鉢形	68×65	丸底	54		3
15	122×104	楕円	N-10°-W	擂鉢形	80×54	丸底	40		4
16	110×90	楕円	N-52°-E	擂鉢形	105×86	丸底	46		4
17	170×(155)	楕円	N-20°-E	たらい状	130×(125)	丸底	44	30号と重複	2
18	68×68	円	—	擂鉢形	50×48	丸底	52		4
19	85×70	楕円	N-53°-W	たらい状	57×60	平坦	32		5
20	80×70	楕円	N-24°-W	擂鉢形	49×45	丸底	40		4
21	127×91	楕円	N-S	不整形	92×55	段々	45		4
22	198×120	長楕円	N-65°-E	不整形	135×80	丸底	46		5
23	233×220	楕円	N-50°-E	不整形	188×168	平坦	65		5
24	85×80	楕円	N-81°-W	たらい状	60×55	平坦	35		4
25	205×140	楕円	N-15°-E	たらい状	65×48	平坦	35		5
26	244×160	半円	N-30°-E	擂鉢形	195×50	段々	89		3
27	188×100	方形	N-42°-W	たらい状	155×70	平坦	42		4
28	70×68	円	—	たらい状	50×40	平 _(二) 坦	30		5
29	147×94	楕円	N-S	擂鉢形	108×63	丸底	46		2
30	(190)×120	長楕円	N-68°-W	たらい状	(168)×75	丸底	52	17号と重複	2



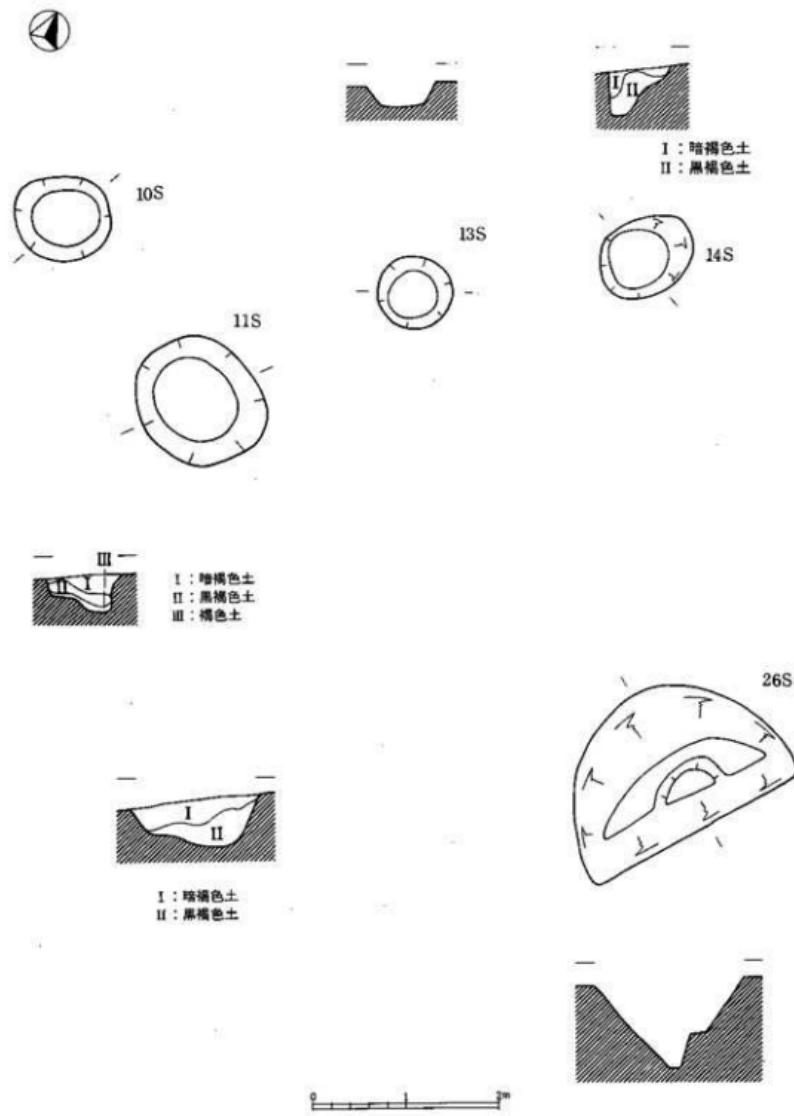
第9図 建物址



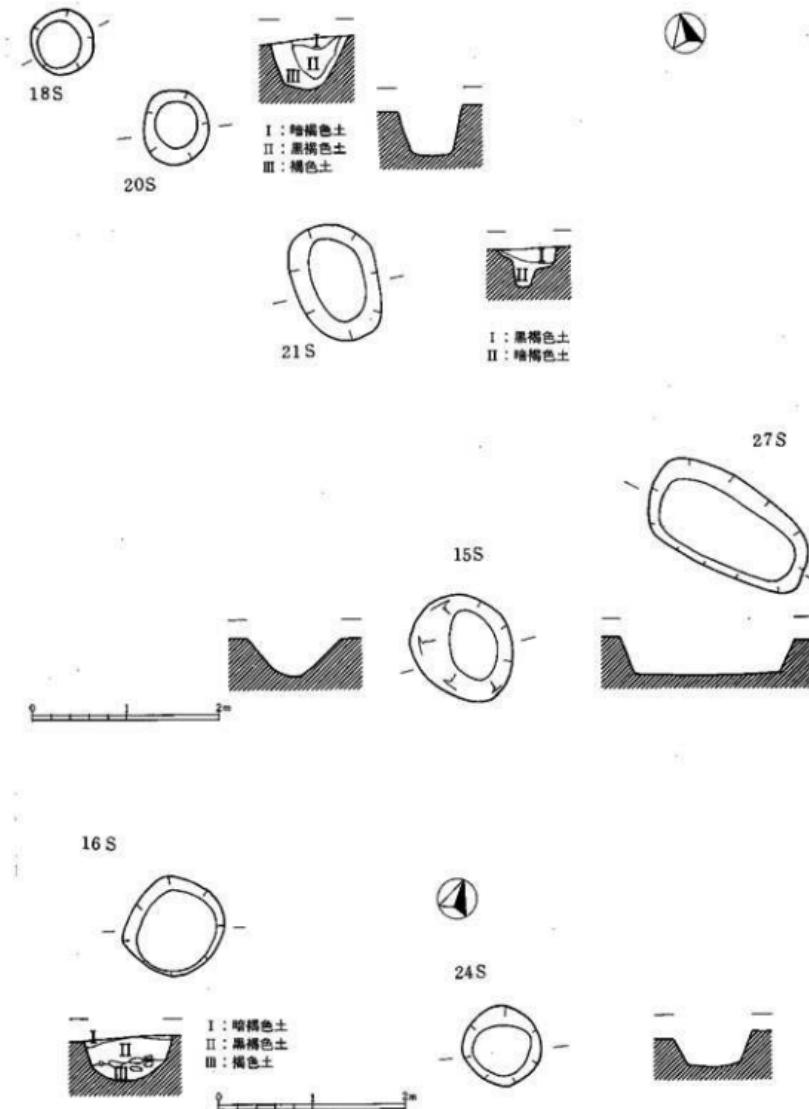
第10図 小竪穴群(1)



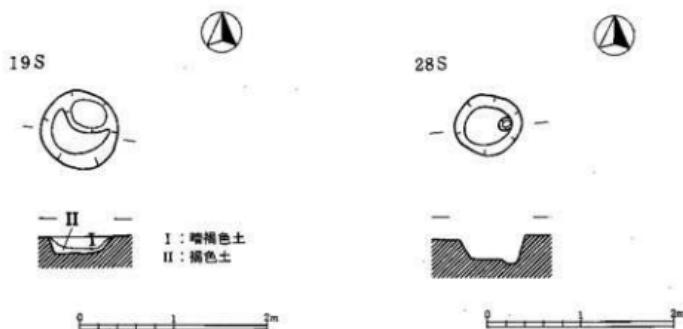
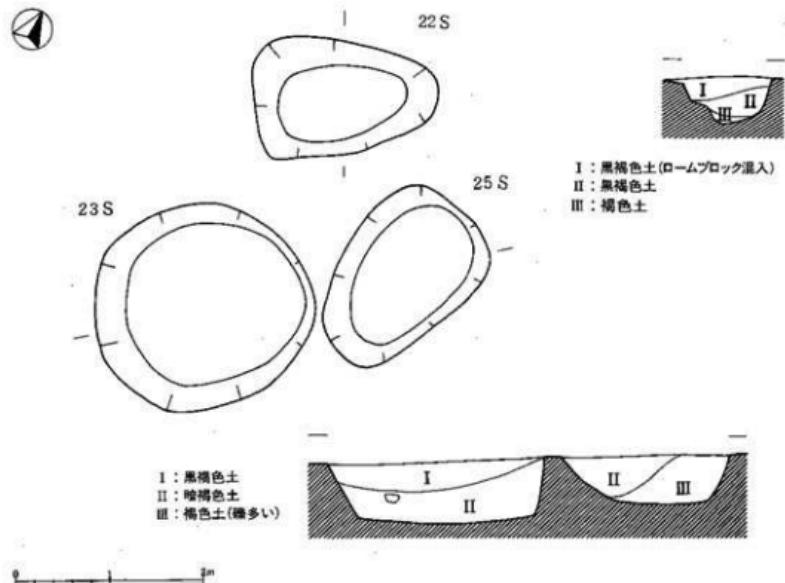
第11図 小竪穴群(2)



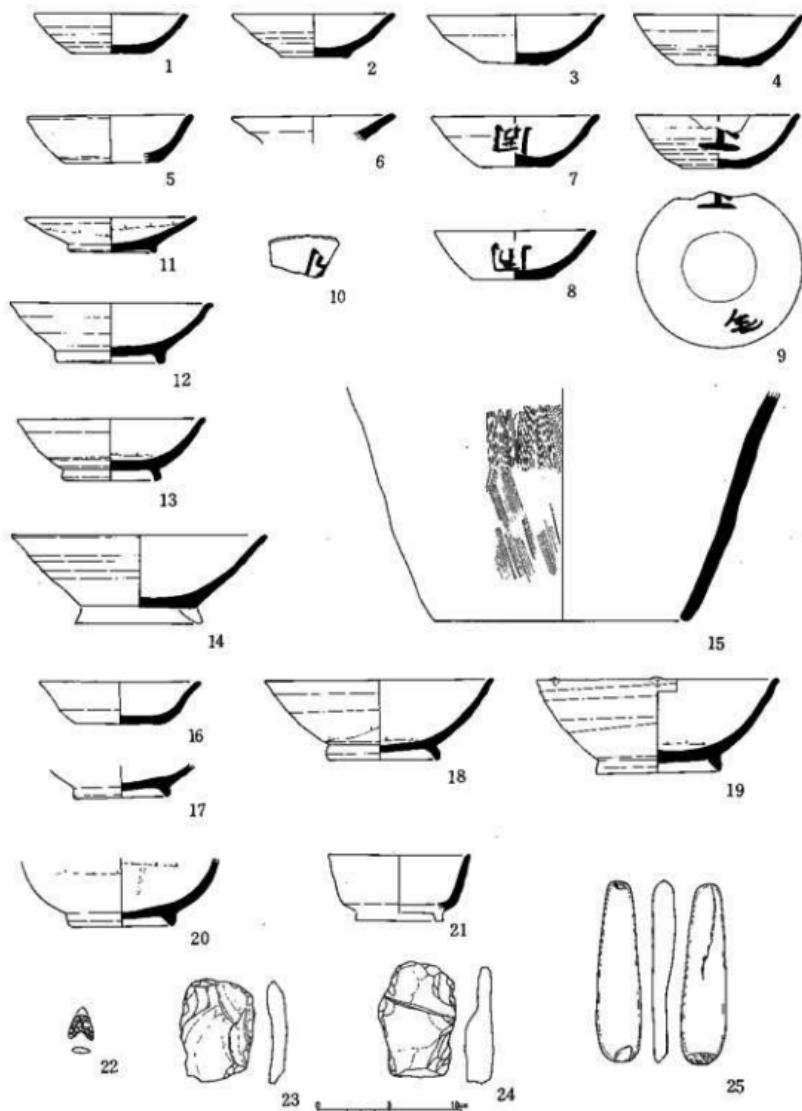
第12図 小竪穴群(3)



第13図 小竪穴群(4)



第14図 小竪穴群(5)



第15図 出土遺物 (1~15:1号住居、16~19・25:2号住居、20:4号住居、21~24:遺構外)

第3表 二本木遺跡土器観察表

出土 地点	図 番 号	種 別	器 種	法 径 (cm)			色 調		焼 成	成形・調整・形態の特徴			備 考
				口 径	底 径	器 高	内	外					
1 号	1	土師器	壺	10.6	5.6	2.7	内底黒紫色 は暗褐色	外底黒紫色 は暗褐色	良	ロクロナデ	底面回転糸切り		
	2	"	"	11.1	4.7	3.0	黄褐色	黄褐色	"	"	"		
	3	"	"	12.3	4.5	3.4	"	"	"	"	"		
	4	"	"	11.6	5.7	3.5	暗褐色	暗褐色	"	"	"		
	5	"	"	11.5	6.5	3.3	"	赤褐色	"	"	"		
	6	"	"	11.2	—	—	黄褐色一部 暗褐色	黄褐色一部 暗褐色	"	"	"		
2 号	7	"	"	11.6	5.0	3.5	黄褐色	黄褐色	"	"	底面回転糸切り	墨書	
	8	"	"	11.2	5.0	3.4	暗褐色	暗褐色	"	"	"		
	9	"	"	11.3	4.6	3.7	黄褐色	黄褐色	"	"	"		
	10	"	"	—	—	—	暗褐色	暗褐色	"	"	"		
	11	灰釉陶器	皿	11.8	6.1	2.4	灰白色	灰白色	"	"	付高台 底面回転糸切り		
	12	"	"	14.1	7.5	4.2	"	"	"	"	底面ロクロナデ		
3 号	13	"	塊	13.0	6.6	4.3	暗褐色	暗褐色	"	"	"		
	14	土師器	"	17.6	—	—	"	"	"	"	底面回転糸切り		
	15	"	瓶	—	17.7	—	"	"	"	"	ハケメ		
	16	土師器	壺	11.2	6.0	2.9	赤褐色	赤褐色	良	ロクロナデ	底面回転糸切り		
	17	灰釉陶器	皿	—	6.6	—	灰白色	灰白色	"	"	付高台底面ロクロナデ		
	18	"	塊	16.0	7.8	5.6	"	"	"	"	"		
4 号	19	"	"	16.8	8.7	6.5	"	"	"	"	"	輪花	
	20	灰釉陶器	塊	—	7.1	—	灰白色	灰白色	良	ロクロナデ	付高台 底面ロクロナデ		
遺構外	21	須恵器	壺	9.9	6.1	4.7	青灰色	青灰色	良	ロクロナデ	付高台 底面ロクロナデ		

第V章 結 語

二本木遺跡は小場ヶ沢川と境沢川にはさまれた西に向かって張り出す台地上にあり、同台地上には上から小丸山、内田原、君石など過去に大きな発掘成果が得られた遺跡が目白押しに連なっている。片丘小学校付属歴史民俗資料博物館には、これらの遺跡から拾い集められてきたおびただしい量の遺物が収納されているが、この中で二本木遺跡から採集された遺物量も決して少なくない。とりわけ縄文時代中期と平安時代の遺物が多く、付近にその時代のかなり大規模な遺跡が存在している可能性を示唆していた。

折りしも今回、その一角で発掘調査を実施する機会が得られ、集落の一端を確認することができた。南側のI地区からは平安時代の住居址4軒と、時代不明の建物址1棟、小竪穴30基が発見された。これらはいずれも中央に東西方方向に走る尾根部の頂部、もしくは南側斜面に集中している。4軒検出された住居址中、規模・内容が比較的はっきりしているのはI・2号の2軒である。しかも両者は火事によって焼け出された焼失家屋であったため、遺物の保存状態が良く、墨書き器を始め、多くの良好な資料を得ることができた。片丘地区の各台地上に立地する平安集落には、内田原廐屋敷、俎原などのように焼失家屋を有するものが多く、今回も例外ではなかった。

建物址は7間(17m)×2間(8m)という大規模なもので、場所柄も含めてその用途については大変興味深いものがある。惜しむらくは出土遺物がなかったことで時代が判明しないことである。

東側のII地区については、I地区的遺構分布からかなり期待されていたが、水路や地表流水の影響を被り、ほとんど消滅している状態であった。

調査区から発見された平安住居址は集落の最も下限に位置するものであり、今回未調査の東側(斜面上方側)に集落の広がりがあるとみられる。また遺構を伴なわない縄文中期の遺物にしても明らかに上方からの流れ込みであり、やはり東側に大集落が存在していることは確かであろう。

最後に今回の発掘は、非常に長期にわたり、また硬い砂利層を取り除くといった難作業が続いたわけであるが、これに深い御理解と御協力をいただいた片丘小学校の小野校長先生、浅野教頭先生を始め、学校関係職員・児童の皆様には深く感謝いたします。

図版 1



二本木遺跡全景(北東側から)



遺構検出作業

図版 2



片丘小学校児童による手伝い



住居址掘り下げ



第1号住居址(奥)と第2号住居址(手前)



第3号住居址と6・7号小整穴

図版 4



第4号住居址

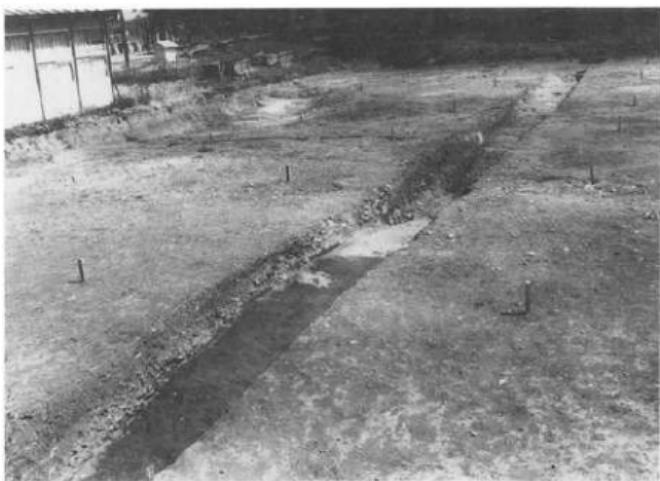


建物址(北側から)

図版 5



22・23・25号小豎穴



Dトレンチ

図版 6



II地区南側掘り下げ



II地区北側全景

「二本木遺跡」

塙尻市立片丘小学校改築工事
埋藏文化財包藏地発掘調査報告書

平成3年3月13日 印刷

平成3年3月15日 発行

発行 塙尻市教育委員会
印刷 極英巧堂印刷所

二本
有
道

卷
三
四
五
六